

名波弘彰先生との思い出

張 栄 順

初めて名波先生にお会いしたのは 1995 年 7 月のことでした。留学する前にご挨拶をかねて研究室を訪ねたときです。そのときの印象は、私がよく観ていたドイツ映画に登場する名優のようなお姿で驚いたことをよく憶えています。緊張して敬語もろくに使えない私に、先生は本当に親切にいろいろなことを教えてくださいました。また翌年の春、大学院の試験に合格したときのことですが、名波先生は入学関係書類のなかにある私の名前を指しながら「これから 5 年間ずっと使う名前だから「張・栄・順」という漢字を間違わないように」とお祝いの言葉とともにおしゃってくれました。それから 10 余年、再び日本で暮らすことになってさすがに自分の名前を間違えることはありませんが、名波先生はそんな些細なことから研究者としての心構えまでを、私に教えてくださいました。

大学院入学後の思い出は数えきれないほど多いです。考えてみると当然かもしれませんが、一般文学の研究室や授業や勉強会といった教室での出来事が走馬燈のように思い出されます。いまは引っ越しをしてとても広くなっていますが、私たちが在籍していた当時の一般文学研究室は本当に狭かったです。しかし、昼夜を問わず、いつも話し声のたえない研究室でした。それは勉強会でも同様でした。先生との思い出としていつも頭に浮かんでくるのは、週に 1 度開かれていた名波先生の勉強会のことです。国籍など問わずに院生の一人一人が自分の研究テーマで発表をし、参加した他の院生たちと時間がある限り討論するという先生の勉強会は、研究仲間がお互いにどのようなテーマを研究して、どのような論文を書くのかを学ぶことができました。確かに、自分の発表が迫ってくるたびに緊張を強いられるものではありませんが、それが同時に研究をしている自分が励まされるような時間でもあったということがいまさらながらに実感をもって理解でき、本当に感謝しています。

けれども、いい思い出ばかりが記憶のなかに残っているわけではありません。院生時代のことを振り返ると辛いことも多かったというのが感想です。当時私は谷崎潤一郎の研究に取り組んでいたのですが、勉強会での自分の発表の未熟さに落ち込んだり、研究仲間の発表に適切なコメントができずに悩んだりする経験の連続でもありました。特に修士論文を書くまでは何度も先生に厳しく指導されました。先生に一生懸命書いた論文を持って行くと、数日後にはいつも真つ赤になって返ってきました。先生の鋭いご指摘を理解できず、自分の主張が先生に伝わらない不甲斐な

さに涙をこらえたこともありました。しかし、そのようなことを何度も繰り返すことによって、私は研究者としてのあり方を学ぶことができました。時間が経つにつれて、一般文学の研究室や勉強会の雰囲気になじみ、名波先生とも気軽に話ができるようになりました。このように筑波大学で積み重ねてきた時間は、いまの私にとってかけがいのない貴重な時間でした。

2002年に私が筑波大学を修了してからもう6年が過ぎました。それでも帰国後も休み中には資料収集のために何度も筑波に来ていましたし、名波先生も招待講演や集中講義などで韓国にいらっしゃることがありました。筑波に行けば先生にお会いできるし、韓国においてもそうだったのです。名波先生の訪韓をきっかけにしてソウルや光州で筑波出身の韓国の仲間たちが同窓会のような集まりを開くことができ、とても楽しかったことを思い出します。そんな飲み会の翌日、光州の小さな食堂の「コムタン」の味に驚き、みんなで「おいしい、おいしい」と言って食べたこと、また2007年に私が結婚するときに荒木先生や吉原先生とともにテジョン(大田)まで来ていただいたことなど、私にとって名波先生との思い出は決して遠いものではなく、とても身近なところにあるものでした。

その名波先生が、このたび筑波大学を退官することになり、何となく寂しい感じがしてなりません。はじめて研究室でご挨拶してからというもの、名波先生と筑波大学とは、私が日本での研究生活を通して成長していくうえでかけがえのない恩師と母校です。先生は、私たち数多くの留学生の日本での研究生活を支えてくれたようにいつまでも院生たちを指導しながら筑波大学にいらっしゃると思っていました。名波先生、院生時代はもちろんのことですが、それ以後もいろいろな面で私を支えてくださって本当にありがとうございました。この誌面を借りてもう一度感謝の気持ちを書き留めておきたいと思います。そして、これからもお世話をかけるかもしれませんが、今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。